

## 会員の声

### どこまでが天文教育か？

「スプライトはどこに発表すべきか」を読んで

矢治健太郎(立教大学)

11月号の佐藤明達氏の「スプライトはどこに発表すべきか」という投稿記事を拝見した。「スプライトは地球大気中の現象なので、天文教育の対象としてふさわしくない」というのが、佐藤氏の主張である[1]。スプライトはASTRO-HSの観測テーマの一つとして提案されて実施されたもので、スプライトを扱うかどうかは、主催者側が判断する問題であると考えている。この会でのASTRO-HS関係の発表では、他の天文現象を含めた発表になっており、スプライトはその一環として触れたに過ぎない、との見解を私は持っている。それを「天文教育の対象とは異なる」と、外野から目くじらを立てるように発言されるのは、あまりにも大人げない。

さて、本会誌でのスプライトに関する記事は、私が知る限り、2つある。一つは、以前私が投稿した「宇宙天気を考えよう」という記事である。私はこの記事の中で「宇宙天気分野は、天文教育と他の地学教育の境界領域であり、天文教育側からその重要性を訴えた方が効果的である」という主張をした[2]。もう一つは、大西浩次氏の「流星電波観測による電波環境モニター」という記事で、流星電波観測の手法によって、雷モニター、電離層モニターが可能であるという内容で、天文教育から物理教育・他の地学教育に広がる興味深い事例だと思った[3]。

ここで一つ問いたい。「どこまでが天文教育か」。この問いは、この会が、天文分野との境界領域・関連分野に対していかに取り組むか、という姿勢を問うている。今回、話題になったスプライトは、2009年打ち上げ予定

の金星探査衛星の観測対象でもあり、将来的に天文教育の対象に十分なりうる。今、「スプライトが天文教育の対象ではない」と切ってしまうのは早計であり、さらに「スプライトは天文現象ではないので、他分野の学会で取り組むべきだ」という声が大きくなるようでは、天文教育は理科教育・科学教育の中で極めて閉鎖的な存在になってしまおうと危惧する。最近では、アストロバイオロジーが天文学と生物学の境界領域と注目されているし、今後、他分野と協力して、事業や実践に取り組む機会はますます増えるだろう。関東支部集会では、これまで太陽観測者やPAOFITSとの共催で新たな参加者の増加や集会の活性化を促してきた。今後も、惑星科学や地球電磁気学などの境界領域・関連分野との共催で支部集会や会合を行う機会もあるだろう。「どこまでが天文教育か？」という問題はないのかもしれない。極論ではあるが。

理科教育の中で天文教育をどう位置づけるか、また天文教育が理科教育の各分野にいかに関与するか。今度、天文教育研究会が20回目を迎えて、振り返るべき課題の一つである。でないと、天文教育は理科教育の中では生き残れない。

#### 参考文献

- [1]佐藤明達,2005,スプライトはどこに発表すべきか,『天文教育』,11月号,p49
- [2]矢治健太郎,2003,宇宙天気を考える,『天文教育』,5月号,p70
- [3]大西浩次,2004,流星電波観測による電波環境モニター,『天文教育』,3月号,p20